

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

Study on the orientation to martial arts of young people

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古澤, 照幸, 小野寺, 孝義 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1039

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



若者の格闘技志向についての研究

Study on the orientation to martial arts of young people

古澤 照幸・小野寺 孝 義

FURUSAWA, Teruyuki ONODERA, Takayoshi

This article was discussed on the orientation to martial arts of young people. These martial arts that women wanted to learn mostly were karate or aikido. This is bipolar orientation. For example, it is hard or soft. Overall, people who wanted to learn “kick and punch” type martial arts were more than “wrestle” type. About TV viewing, people watched more TV program of “kick and punch” type martial arts than “wrestle” type. Positive correlations were obtained between sensation seeking and the amount of TV viewing, and more between sensation seeking and interest in martial arts. These correlations show “risk taking” factor about martial arts. Referring to these results, we intend to develop scales about martial arts.

キーワード：格闘技志向、刺激欲求、若者

Key words : orientation to martial arts, Sensation seeking, young people

はじめに

ここ数年、格闘技ブームと言われている。力道山、その弟子であるジャイアント馬場、アントニオ猪木が活躍し、猪木の弟子であるタイガーマスクが一世を風靡する1960年代から1980年代初めまではプロレス番組は金曜8時または土曜8時のゴールデンタイムを占拠していた。その後、プロレス番組は夕方時間帯に移り、さらに現在では深夜へと人の目の届きにくい時間帯に移されている。この間、団体は30とも40とも言われる数へと膨張を続け、いくつもの団体が倒産している。

しかしながら、プロレスがメディアにおいて中央から周辺に追いやられるなか、キックボクシングや空手などの打撃系格闘技の選手

を集めて大会の興行を行ったK-1、そして打撃、投げ、関節技の打・投・極の総合格闘技の祭典であるPRIDEなどはゴールデンタイムを占めることもあるほどに成長している。もともとK-1は正道会館の石井館長がプロデューサーとして作り上げたものだが、1990年代の初めにはその配下の選手達を新日本プロレスから飛び出した前田日明のリングスに参戦させることによってプロレスファンに浸透させ、これがK-1の現在の人気の元になったと考えられている(安田、2002)。PRIDEにしても、総合格闘家にプロレスラーを戦わせる形式によってプロレスファンを取り入れ、これが現在の人気に火をつけた形になっている。

いずれにしても、現在の格闘技ブームはプ

レスファンをひとつの核とし、そこから拡大し新たなファンを獲得していったものと考えられる。この点からも格闘技ブームを担う人々の多くは、格闘技未経験者であり、経験者は少数であることが推測できる。では、こういった「素人ファン」は格闘技に対し、何に興味を持ち、何を求めているのだろうか。小野寺・古澤(2001)はこういった観点から若者の格闘技意識の調査を行っている。本研究では、先行研究の再現性の問題と格闘技経験者の意識調査も含めて調査を実施した。また、登山、スキーなどのリスク・スポーツと関連が見られている刺激欲求尺度(古澤、1997)を調査に実施し、これも含め、若者の格闘技意識を検討する。まずは、参考までに格闘技の分類から見ておきたい。

1. 格闘技の分類

格闘技は、先にも述べたとおり打・投・極が基本となる。打はキックボクシング、空手、ボクシングが代表的な格闘技となり、投は柔道、相撲、極はサンボとなろう。これらのうち投・極はレスリング型格闘技(桑原、1997)と言われているが、これを中心に桑原(1997)の分類を見ておこう。

桑原(1997)は、レスリング型格闘技について、競技規模や普及の程度による分類としては、広範囲かつ国際的に普及し、国際的な組織を持つ「近代スポーツ群」、国内や限られた地域でのみ分布がみられる文明社会でのレスリング型格闘技「民族格闘技群」、少数民族または、経済や社会構造から、未開社会とされている地域のレスリング型格闘技である「未開社会の格闘技群」に分けている。近代スポーツ群としては、レスリングや柔道、民族格闘技群としてはシルム(朝鮮半島)や

相撲(日本)がある。競技形態による分類としては、藤原(1990)の「着衣型」「裸体型」による分類をあげている。発生の観点からギリシャ、ローマを中心に発達したギリシャ系の「裸体型」、中央アジアを中心に発達した騎馬民族系の「着衣型」があるとし、前者は裸体でなくても、組み合った際に着衣、ベルトなどを握らずに競技するタイプであり、後者はほぼ裸体であっても、組み合った際に着衣やベルトなどを握って競技するタイプとなる。したがってほぼ裸体であるが相撲は着衣型になり、タイツを着用するがレスリングは裸体型ということになる。また、松浪(1993)の呼びわけとしては、立ち技のみの相撲型と立ち技と寝技の両用であるレスリング型がある。

これらの分類のなかで、競技規模や普及の程度による分類の3つの群についてすべてに共通な特性として桑原(1993)は「友好性」「娯楽性」を指摘している。また、レスリング型格闘技は闘争的性格が弱く、遊戯に近い存在であるとしている。打撃型格闘技について闘争性、殺伐性を暗に指摘していることになろう。

2. 方法

さて、スポーツ・格闘技への興味・関心について質問紙を作成し、調査を実施した。対象とした格闘技は小野寺・古澤(2001)で対象とした柔道、空手、レスリング、少林寺拳法、テコンドー、キックボクシング、ボクシング、合気道、柔術、サンボ、修斗に相撲を加えた。これらは、打撃系の空手、テコンドー、キックボクシング、ボクシング、修斗、レスリング系の柔道、レスリング、合気道、柔術、サンボ、相撲、そして打・投・極のすべてを持ち合わせている少林寺拳法に分類されるが、打撃系、レスリング系とも「近代スポーツ群」

「民族格闘技群」に相当する格闘技によって構成されている。

質問項目 質問項目は以下のとおりである。

- Q1：テレビでA)プロレス（リングス、パンクラス含む）、B)総合格闘技（修斗、PRIDE、コロシウム2000などを含む）、C)ボクシング、D)キックボクシング（K-1を含む）、E)相撲、F)その他の格闘技をそれぞれどれほど見るか
- Q2：スポーツを見ることに興味・関心があるか
- Q3：スポーツを自分でやることに興味・関心があるか
- Q4：格闘技を見ることに興味・関心があるか
- Q5：格闘技を自分でやることに興味・関心があるか
- Q6：学校の正規の授業以外で学んだ格闘技は何か
- Q7：格闘技の経験年数
- Q8：現在の級位や段位
- Q9：学ぶとしたらどの格闘技を選ぶか
- Q10：格闘技をはじめた理由は何か
- Q11：格闘技をはじめたきっかけは何か
- Q12：格闘技のどんなところに興味をもって

いるか

Q13：格闘技を行ってどんなところに興味をもつか。

刺激欲求尺度 刺激欲求尺度（Sensation Seeking scale:SSS；古澤他、1997）についてはTAS（スリル・冒険指向）、ES（新体験指向）、DIS（社会的抑制解除指向）、BS（屈屈嫌悪指向）の4領域について各10項目、計40項目について二者択一で尋ねた。最終的には項目を加算処理して4つの尺度を構成した。本研究において使用するSSSはSSS-Form V（Zuckerman、1978）の日本語版であり、その他には質問内容の抽象性を高めたSSS-AE（古澤、1989）がある。

被験者 被験者は、東京都内の私立大学の2年生を中心とする2つの授業の受講生196名（男性54名、女性142名）であった。

調査時期 調査は2002年1月に実施された。

3. 結 果

経験者の割合 学校の正規の授業以外の格闘技経験者は35名（表1の1～12の計）であり、全体の18.0%であった。小野寺・古澤（2001）の結果（17.7%）とほぼ同じ結果である。男

表1 学校の正規の授業以外で学んだことがある格闘技の度数(パーセント)

	男 性	女 性	計
1. 柔 道	10(18.87)	12(8.45)	22(11.28)
2. 空 手	1(1.89)	2(1.41)	3(1.54)
3. テッコンドー	0(0.00)	1(0.70)	1(0.51)
4. キックボクシング	1(1.89)	0(0.00)	1(0.51)
5. ボクシング	0(0.00)	1(0.70)	1(0.51)
6. 合気道	0(0.00)	3(2.11)	3(1.54)
7. 柔 術	0(0.00)	2(1.41)	2(1.03)
9. 総合格闘技	0(0.00)	1(0.70)	1(0.51)
12. 少林寺拳法	1(1.89)	0(0.00)	1(0.51)
13. な し	40(75.47)	120(84.51)	160(82.05)
計	53(100.00)	142(100.00)	195(100.00)

複数回答者は、除外（複数回答者は相撲の経験者）サンボ、相撲、レスリングは経験者なし

女差としては、男性が格闘技の経験が24.53% (=100.00-75.47) であり、女性の15.49% (=100.00-84.51) より、高い割合を示している。格闘技のなかでは、柔道がもっとも多い割合であり、男性で18.87%、女性で8.45% であり、これらは前者が経験者の2/3、後者の1/2を占める結果である。

テレビ視聴と興味 表2は、テレビ番組として見ることの可能な格闘技についてどの程度

見るのかを4段階で質問した結果である。プロレス（リングスは調査時点以降に団体が解散している）、総合格闘技、ボクシング、キックボクシングともに見る程度は男性の方が女性よりも有意に高い。相撲については男女差は見られていない。

表3は、スポーツや格闘技を見ること、そしてやることへの興味の程度について7段階で質問した結果である。4つの項目すべてで

表2 テレビにおける視聴の程度（男女別の平均、標準偏差、t値）

	男 性		女 性		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1. プロレス（リングス、パンクラスを含む）	2.48	0.97	1.47	0.74	6.94 **
2. 総合格闘技（修斗、PRIDEを含む）	2.67	1.06	1.39	0.68	8.22 **
3. ボクシング	2.83	0.95	1.78	0.87	7.39 **
4. キックボクシング（K-1を含む）	2.91	1.01	1.70	0.96	7.76 **
5. 相 撲	1.93	0.77	2.04	0.82	-0.90

回答形式は4段階（1：全く見ない～4：よく見る）

** p<.05

表3 スポーツ/格闘技を見ること/やることへの興味の程度（男女別の平均、標準偏差、t値）

	男 性		女 性		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1. スポーツを見ること	5.76	1.57	4.99	1.33	4.31 **
2. スポーツを自分でやること	6.02	1.41	4.99	1.36	4.70 **
3. 格闘技を見ること	4.59	1.50	2.75	1.50	7.66 **
4. 格闘技を自分でやること	3.48	1.98	2.06	1.55	4.77 **

回答形式は4段階（1：全くない～7：非常にある）

** p<.05<.05

表4 学びたい格闘技についての度数（パーセント）

	男 性	女 性	全 体
柔 道	5(9.43)	23(13.67)	28(14.66)
空 手	9(16.98)	33(23.91)	42(21.99)
テッコンドー	2(3.77)	2(1.45)	4(2.09)
キックボクシング	4(7.55)	6(4.35)	10(5.24)
ボクシング	14(26.42)	11(7.97)	25(13.09)
合気道	8(15.09)	37(26.81)	45(23.56)
柔 術	5(9.43)	2(1.45)	7(3.66)
総合格闘技	3(5.66)	1(0.72)	4(2.09)
相 撲	1(1.89)	1(0.72)	2(1.05)
少林寺拳法	2(3.77)	15(10.87)	17(8.90)
計	53(100.00)	138(100.00)	191(100.00)

男性が女性よりも有意に高い値を示している。また、数値としては、格闘技を見ること／やることよりもスポーツを見ること／やることの方が高い結果である。

表4には、学びたい格闘技についての度数とパーセントを示した。男性では、ボクシングが26.42%、空手が16.98%と打撃系の格闘技が合わせて40%を超えている。女性は合気道が26.81%、空手が23.91%であり、この2つの格闘技がもっとも高い値を示している。

表5は格闘技のどんなところに興味があるのかを質問した結果である。ここでは、半数近くが「興味はない」と答え、他の回答頻度が少なくなっているため、男女込みにして結果を示した。全体の10%前後の回答を示したのは「人と人とのぶつかり合いの迫力(10.34%)と「打撃技(パンチ/キック)の攻防」(9.77%)である。「ぶつかり合い」は相撲やプロレスなどのレスリング型格闘技の一部に見られるものである。また、やや特殊に見えるかもしれないが、「選手たちの背後に控えるドラマ」が次の順位(8.05%)を示

している。

テレビ視聴、興味と刺激欲求との関係 つぎにテレビ視聴、スポーツ/格闘技の興味と刺激欲求との関係を見てみよう。刺激欲求尺度については、4つの下位尺度それぞれに主成分分析を施し、第1主成分の固有値を算出し、そこから信頼性の最高値の推定値である θ 係数を算出した(表6)。 θ 係数は0.49~0.73の値を示している。TASは十分な高い値であるが、他の3つの尺度はそれほど高い値とは言えない。

男性の相関係数は表7に示し、女性の相関係数は表8に示した。表7において、テレビ視聴と刺激欲求との間では総合格闘技とTASが0.30の有意な相関を示し、キックボクシングとボクシングがDISとともに.29の有意な相関を示している。また、相撲はBSと負の有意な相関($r=-.31$)を示している。スポーツ/格闘技の興味との相関では、TASとすべて有意な相関を示している。

表8においてテレビ視聴と刺激欲求の間ではプロレスがBSと低い有意な相関

表5 格闘技のどんなところに興味があるかの度数とパーセント

	度 数	パーセント
4. 投げ技(倒す、組み伏せる)の攻防	3	1.72
6. 打撃技/投げ技から関節技までの一連のプロセス	7	4.02
9. 鍛えられた肉体	7	4.02
7. 相手の攻撃を瞬時にかわす技術	8	4.60
5. 選手の打たれ強さ	10	5.75
8. 応援している選手の勝利	11	6.32
10. 選手達の背後に控えるドラマ	14	8.05
3. 打撃技(パンチ/キック)の攻防	17	9.77
1. 人と人とのぶつかり合いの迫力	18	10.34
11. 興味はない	79	45.40
有効回答	174	100.00

表6 刺激欲求尺度(SSS)の θ 信頼性係数

TAS	ES	DIS	BS
0.73	0.49	0.52	0.50

($r=0.21$) を示し、総合格闘技とTASが0.18、ESが0.20の低い有意な相関を示している。スポーツ/格闘技の興味との相関では、スポーツを見ることがTASと0.17の低い有意な相関を示し、スポーツを自分でやるのがTAS、ES、DISとそれぞれ有意な相関を示している。また、格闘技を見ることはDIS以外と有意な相関を示し、格闘技を自分でやることはESと0.24の有意な相関を示している。

格闘技経験者の興味 表9は格闘技を行っての興味について質問した結果である。興味がないという回答者の割合が多い(71.11%)ため、度数を考慮し、これも男女込みで結果を示している。度数として最も多いのは「稽古を行うことで精神的な充実が得られるこ

と」が11名(6.11%)であった。「興味はない」を除いた52名のなかでの割合としては21.15%を占めている。「技をくり返し稽古して、自分のものにすること」と「打撃技(パンチ/キック)」が9名で5.00%である。これらも「興味はない」を除いた52名のなかでの割合としては17.31%となり、各々1/6程度を占めることになり、この両者で1/3ということになる。また、次に頻度が多いのが「組み手、乱取りなどの攻防において相手をコントロールしようとする工夫」「組み手、乱取りなどの攻防において相手との激突」「大きな声を出してスカッとすること」「稽古を行うことで気持ちがひきしまること」であり、それぞれ5名(2.78%)である。

表7 テレビ視聴、スポーツ/格闘技を見ること/やることと刺激欲求との相関(r)(男性)

		TAS	ES	DIS	BS
テレビ視聴	1. プロレス(リングス、パンクラスを含む)	0.25	-0.25	0.11	0.23
	2. 総合格闘技(修斗、PRIDEを含む)	0.30*	-0.09	0.10	-0.03
	3. ボクシング	0.26	-0.02	0.29*	0.08
	4. キックボクシング(K-1を含む)	0.21	0.12	0.29*	0.03
	5. 相撲	0.00	0.14	-0.15	-0.31*
見ること/やること	1. スポーツを見ること	0.31*	-0.13	0.26	-0.04
	2. スポーツを自分でやること	0.51**	-0.02	0.12	0.07
	3. 格闘技を見ること	0.34*	-0.03	0.26	-0.06
	4. 格闘技を自分でやること	0.38**	0.12	0.23	0.08

* P < .05 ** P < .01

表8 テレビ視聴、スポーツ/格闘技を見ること/やることと刺激欲求との相関(r)(女性)

		TAS	ES	DIS	BS
テレビ視聴	1. プロレス(リングス、パンクラスを含む)	0.03	0.02	0.02	0.21*
	2. 総合格闘技(修斗、PRIDEを含む)	0.18*	0.20*	0.06	0.06
	3. ボクシング	0.07	0.03	-0.01	-0.02
	4. キックボクシング(K-1を含む)	0.16	0.09	0.05	0.13
	5. 相撲	0.05	0.02	0.11	-0.02
見ること/やること	1. スポーツを見ること	0.17*	0.11	0.08	0.05
	2. スポーツを自分でやること	0.30**	0.19*	0.22**	0.04
	3. 格闘技を見ること	0.20*	0.18*	0.15	0.20*
	4. 格闘技を自分でやること	0.16	0.24*	0.14	0.13

* P < .05 ** P < .01

4. 考 察

学校の正規の授業以外で学んだことがある格闘技では、男女ともに柔道が最も多い割合を示していた。しかしながら、学びたい格闘技は柔道よりも空手や合気道の方が男女ともに高い割合を示していた。この傾向は特に女性に顕著であり、空手と合気道を合わせれば、女性全体の50%を超えるものであった(50.72%)。小野寺・古澤(2001)でも同様に女性でこの両者を学びたいとする者がもっとも多く、女性の格闘技志向はハードなイメージの空手とソフトなイメージの合気道に二極化しているといってもよいであろう。合気道の結果は予想できるものであるが、空手の回答が多いのは理解しにくいかもしれない。しかしながら打撃系格闘技であるテコンドー、キックボクシング、ボクシングを空手に合算すれば、女性全体の37.78%までが打撃系格闘技に興味をもっていることがわかる。少林寺拳法が打撃も主要な技術であることを考えると、さらに打撃系への興味は高いものと考えられよう。昨今のボクササイズへの女性の興味や女性のボクシングやキックボクシングのプロ化などを考えると、この結果は不

思議なものではないように思われる。女性の格闘技志向についての調査は本研究と小野寺・古澤(2001)以外には見当たらないため、もともと女性に打撃系格闘技志向があり、それが割合として多いのかどうかは断定できない。しかしながら、この志向が最近のものだとすると、社会文化的な変化によるものか、環境化学物質によるものか、のどちらか一方または両者によることも考えられよう。

テレビにおける視聴については相撲を除き、格闘技の番組は男性の方が女性よりもよく見ることが分かった。表2を再度確認してみると、男女とも、ボクシングやキックボクシングの打撃系格闘技が視聴の程度が高い傾向が見てとれ、これが表4の学びたい格闘技に反映しているように考えられる。女性については、相撲の平均値がさらに高くなっており、他の格闘技よりも見る傾向にあった。テレビ視聴と刺激欲求との相関(表7、表8)からは、総合格闘技が男女ともにTASと有意な正の相関を示していた。TASについては、リスクなスポーツを行う者が高い傾向が示されており(Smith et al., 1992)、その観点では合理的な結果である。女性では総合格闘技とはESも正の相関が見られていたが、総合格

表9 格闘技を行っての興味の度数とパーセント

	度 数	パーセント
8. 稽古をするなかで味わえる友情	1	0.56
4. 投げ技(倒す、組み伏せる)	2	1.11
5. 組み手、乱取りなどの攻防において相手をコントロールしようとする工夫	5	2.78
6. 組み手、乱取りなどの攻防における相手との激突	5	2.78
7. 大きな声を出してスカッとすること	5	2.78
9. 稽古を行うことで気持ちがひきしまること	5	2.78
1. 技をくり返し稽古して、自分のものにする	9	5.00
3. 打撃技(パンチ/キック)	9	5.00
10. 稽古を行うことで精神的な充実が得られること	11	6.11
11. 興味はない	128	71.11
計	180	100.00

闘技を新たな経験として見ているとうことが考えられよう。男性では、ボクシングとキックボクシングがDISとの相関が有意であったが、これら格闘技は見ることで社会的な抑圧を発散しているのではないだろうか。相撲はBSと負の相関であったが、単純なことの繰り返しにも飽きない傾向の人が見ることになる。アマチュアの相撲だけでなく大相撲でもそうだが、1分以内の取り組みが何番も続く。こういった相撲の興行の特徴がこういった結果を導いた可能性がある。

スポーツ／格闘技を見ること／やることへの興味については全4項目で男性が女性よりも高い値であった。男女とも、スポーツを見ることとやることとの間には大きな差異は認められないが、格闘技を見ることとやることとの間には1ポイント近くやることの方が低い結果であった。この結果からも、近年の格闘技ブームは自分でやることではなく、見ることのブーム、すなわち観客としてのブームであることが示されたことになる。スポーツ／格闘技を見ること／やることへの興味と刺激欲求との相関については、表7、表8で示されたように、男性ではTASが全4項目で有意な相関を示していた。スリルを求める傾向にある人がスポーツや格闘技に関心が高いということが分り、これは女性でも同様の傾向にある。ESとは女性がスポーツを見ること以外の3つの項目と有意な相関を示していた。スポーツを見ることは新たな経験にはならないが、やることは新たな経験を求めることになろう。女性にとって、格闘技は見ることも新たな経験として満足するものと考えられよう。

格闘技のどんどころに興味があるか（格闘技を見ての興味）という質問に対しては、

「選手たちの背後に控えるドラマ」が割合としては上位3位となるものであった。選手の過去の経験、過去の試合結果や選手間の感情のやりとりなどがこれに含まれるものであろう。目の前の攻防だけではない、深い見方をする者が多く存在するということになる。

格闘技を行っての興味としては「稽古を行うことで精神的な充実が得られること」がもっとも高い割合を示していた。「稽古を行うことで気持ちがひきしまること」「大きな声を出してスカッとすること」まで含め、心理的な効果と考えられる項目群が「興味はない」を除いた52名のなかで4割を超える割合となっている。格闘技を行うものは単に技術的なものだけでなく、格闘技から得られる心理的なものをも求めているということになる。

若者の格闘技志向についてテレビ視聴や格闘技についての興味の程度、格闘技のどういった部分に興味があるか等について検討を行った。今後は、格闘技志向についての測定尺度を開発する予定である。刺激欲求との関係ではテレビ視聴や格闘技を見ること、やることの興味とはTASと正の相関があることが分かったが、こういったことや女性の格闘技志向の二極化などの知見は格闘技志向尺度の開発に役立つものであろう。格闘技志向の下位概念については、本研究の結果や今後の調査結果を生かして構成し、尺度の開発を行っていきたい。また、格闘技経験者への調査や格闘家への調査を通して、一般の回答者との心理的な特徴の違い等を検討していく予定である。

参考文献

- 藤原稜三 1990 「格闘技の歴史」 大修館書店
- 古澤照幸 1989 刺激欲求尺度抽象表現項目版
(Sensation Seeking Scale-Abstract Expression;
SSS-AE) 作成の試み 心理学研究
,60,180-184
- 古澤照幸・竹内美香・吉野相英 1997 刺激欲求尺
度 (Sensation Seeking Scale) の男女間、国
の間における因子の類似についての考察 産能
短期大学紀要 30,85-95
- 古澤照幸・小野寺孝義 2002 若者の格闘技指向に
関する研究(2) 日本心理学会第66回大会発表論
文集 1210
- 桑原伸弘 1997 レスリング型格闘技の性格に関す
る一考察 和歌山工業高等専門学校研究紀要
32, 61-65
- 松浪健四郎 1993 「格闘技の文化史」 ベース・
ボールマガジン社
- 小野寺孝義・古澤照幸 2001 若者の格闘技指向に
関する研究(1) 日本心理学会第65回大会発表論
文集1090
- Smith, R. E., Ptacek, J. T., & Smoll, F. L. 1992
Sensation seeking, stress, and adolescent in-
juries: A test of stress-buffering, risk-taking,
and coping skills hypotheses. *Journal of Per-
sonality and Social Psychology*, 62, 1016-1024
- 安田拓了 2002 2人のカリスマ 週刊プロレス
1112, 44-45
- Zuckerman, M., Eysenck, S., and Eysenck, H.
1978 Sensation seeking in England and Amer-
ica: Cross-cultural, age and sex comparison.
Journal of consulting and clinical Psychology. 46,
139-149.